

長いお休み ～A Long Vacation～

池田真也

向井浩一(22)卒業をひかえた平凡な大学生。

服部和彦(21)浩一の高校時代の同級生

遊子(21)同

津島陽子。同。浩一は彼女が忘れられない

坂井(23)浩一のアルバイト仲間

遊子の恋人(23)

服部の恋人(19)

#何も写っていない画面に陽子の顔が何回かぱつと写る。

浩一「ナレーター」「久しぶりにあいつの夢を見た。」

#真夜中のコンビニエンスストア

無気力にレジをうっている浩一

この店でアルバイトをしている。

#帰り道。同僚の坂井と。朝の光がまぶしい坂井「おまえ夏休みどうするんだよ。」

浩一「別に。お前は」

坂井「俺は就職活動だよ。はやく内定とりたいよ。お前は決まってるからいいよな。」

浩一「名もないへなちよこ会社だぜ。」

坂井「いいところじゃねえかよ。学生時代最後の夏休みっていうのによおきついで全く。」浩一「でもつまんねえなあ。」

坂井「田舎には帰んねえのかよ。」

浩一「帰んねえよ。」

#陽子フラッシュ

#浩一のアパート

夢から覚める浩一。なんとなく良かったるい。起き上がりうだうだする。

電話を取る。

浩一「もしもし母さん。」

タイトル「長いお休み。」

#服部の車の中

大学4年の夏休み、浩一は帰省して4年ぶりに高校時代の親友服部³に会う。

服部「お前のそのシャツいくら？」

浩一「これ？安いよ。五千円ぐらいじゃない」

服部「へえ。安いな。」

浩一「むこうは洋服とかは結構安いんだ。家賃とかは馬鹿高いけどな。」

服部「すっかり東京人になっちゃって。」

浩一「そんなこたあねえよ。」

服部「もう俺なんて見捨てられたのかと思ってたんだぜ。」

服部笑う

服部 「東京はどうだよ。」

浩一 「どうって？」

服部 「やっぱりすごいか？」

浩一 「そうだな。でも東京じゃなくちゃできないことってそんなにはないんじゃない。」

服部 「じゃあ、なんでUターンしねえんだよ。」

浩一 「さあ。…なんとなくだな。あーあ卒業か。」

服部 「学生はいいねえ。でも女は違うだろ。東京の女って洗練されるよな。」

浩一 「女か。」ため息。「そんなことないよ」窓から外を見る浩一。

浩一を見る服部。

浩一の回想

高校時代の陽子

河原

川のへりに座って2人はビールを片手に煙草を吸う

浩一 「落ち着くよな。」

服部 「ああ。あのころって、なんかあるとここに来てたよな。」

浩一 「いま何時。」

服部 「6時ちよつとすぎ。」

浩一 「三十分ちよつとか。チャリンコだとそれだけで一日つぶれちゃうのにな。」

服部 「一時間以上かかったよな。」

浩一 「そうだろうな。」

服部 「信じらんねえな。」

浩一 「高校ん時つて、煙草吸うと頭がくらくらしてさあ……。あのとき吸った煙草が一番うまかったよな。」

服部 「ああいう煙草つてもう吸えないかもしれないな。」

浩一 「吸えないのかな。」

5

浩一 「立ち上がりほとりまで進む。石をひろつて投げたら水の上を何回もはねた。」

服部 「お前さあ。なんで4年も帰つて来なかったんだよ。」

浩一 「うーん……。帰つて来ちゃうともう、むこうに戻れないような気がしつむ。」

服部 「東京か。」

浩一 「このあたりも変わんねえな。」

服部 「4年で変わるかよ。」

浩一 「4年か。卒業してからそんなに経つんだな。」

服部 「早いよな。」

浩一「こんな22歳になるなんて全然想像してなかったよ。」

服部「俺まだ21歳。」

浩一「そうだっけ？」

服部「俺10月生まれだもん。おまえ4月だよな。浩一「4月25日。何の日か知ってる。」

服部「なんだっけ。なんかあったな。」

浩一「尾崎豊の命日だよ。よく覚えとけよ。」

服部「尾崎の命日か…そうだよそうだよ。あの日のこと覚えてるか？」

浩一「新宿でうどん食ってた。」

服部「俺は得意先で聞いてさ。もうあの日は仕事になんなかったな。」

浩一「『盗んだバイクで走りだす』か。」

服部「ショックだったよ。」

浩一「青春時代は終わったのさ。」

石を投げる。

服部「お前さあ…。」

浩一「…なんだよ。」

服部「この間、津島に会ったぜ。」

浩一「そう…どうだったよ。」

服部「彼女すっごく綺麗になってたよ。」

浩一「そう。」

服部 「やめようか。この話。」

浩一 「いいよ。それで。」

服部 「平気か。」

浩一 「いいから話せよ。」

服部 「結婚するんだってよ。」

浩一 「…新田の野郎とか。」

服部 「違う。あいつとは別れたってさ。銀行員。27歳の」

浩一 「じじいだな。」

服部 「普通だよ。」

浩一 「それで式は？」

服部 「2月。」

浩一 「今頃やりまくってるんだろうな。畜生。」服部 「分かった。」

浩一 「なにが？」

服部 「いや。やっぱりいや。」

駅

夕方。陽子を待つ浩一。彼につきあう服部。

服部 「こねえよ。」

浩一 「…」

服部 「今更会ってどうするんだよ。」

浩一「帰ってもいいんだぜ。」

服部「……いいよ。つきあうよ。」

藤沢程度のちよつとした街

かつての同級生、遊子を待つ服部と浩一。

ギターをかついで遊子やってくる。

服部「おう。来た来た。」

遊子「よう。元気だった。向井。」

浩一「まあまあだな。」

遊子「お前はいつでもまあまあだな。」

浩一「遊子はどうなんだよ。」

遊子「あたしはいつでも絶頂よ。」

浩一「今なにしてるんだよ。」

服部「プーだよ。プー。」

遊子「自由人と呼んで。自由人と。」

浩一「ずっとこっちにいるのか。」

遊子「いまはたまたまね。ジプシー生活でき。ちよつと前まではねえ、エジプトにいたんだ。」

浩一「エジプト？」

遊子「3カ月ぐらい。」

服部 「エジプトでなにしてたんだ。」

遊子 「旅にきまつてるじゃない。」

浩一 「だれと？」

遊子 「ひとりですよ。」

服部 「女がひとりで？」

遊子 「そういう差別的な発言は好きじゃないな。旅はひとりでするもんよ。」

浩一 「やるなあ。どうだったよ。」

遊子 「もう最高。永住しようかって思っちゃった。あたしね、東京にも住んでたんだよ。」

浩一 「どこだよ？」

遊子 「中野。あんたは？」

浩一 「成増。」

遊子 笑いだす。

遊子 「さすが向井。東上線っていう顔してるわ。」

服部 「なんだよ。トージョーセンって？」

遊子 「東京でいちばんイモイモでダサダサの電車よ。成増ってさあ、3歩あるいたら埼玉なんだよね。」

浩一 「うるせえチビ。口の悪さは相変わらずだな。」

服部 「でもよお、こいつお前に会いたがってたんだぜ。」

浩一「そうか。俺にほれてるのか。向井浩一も罪な男よのう。」

遊子「なんであたしがあんたみたいなのほっぺの赤い埼玉人にほれなきゃいけないのよ。」

浩一「東京だ。」

遊子「埼玉よ。」

服部「ところでそのギターはなんだよ？」

遊子「道路とかで歌ってるの。ジャカジャカジャカって。」

服部「帽子おいて？」

遊子「『おめぐみを』ってね。」

#廃止された鉄道の線路

遊子はギターのチューニングをしている。

服部「どんなのできるんだよ？」

遊子「どんなのがいい？」

浩一「オリジナルねえのかよ。」

遊子「オリジナル？まあ、あることはあるけど。」

服部「じゃあ一番いい曲やれよ。」

遊子「でもあんまりたいしたことないよ。」

浩一「わかってる。わかってる。誰も期待してないって。」

遊子むくれる。

遊子「じゃあ一曲。いつもは客、選ぶんだけど。」

服部「はいはい。わかったわかった。」

遊子「では」唄いだす遊子

曲は続く

#回想。

部屋でひたすらクロスワードパズルをする遊子。外をちらっと

見る。外に出たい。

クロスワードパズルをする。できなくていらいらする。外を見

る。まぶしい。

ドアをあけて出て行く遊子

11

#喫茶店。遊子の回想。

遊子「ほかにいい娘みつけたんだ。」

男「お前にはさ、俺みたいなちやちな男は似合わないよ。」

遊子「ずるい。」

男「ごめん。」

遊子、サングラスをかける。

遊子「全然。…全然悲しくなんかないからね。代わりなんていっぱいいるんだから。あんたみたいな豚野郎なんかよりいい男なんてあたし

にはいっぱいいるんだから。」

男 「・・・じゃあ俺行くよ。元気だな。」

遊子 「ねえ。（何かをうったえる表情）」

男、立ち止まり振り返る。

遊子、言いたいことがあるのに言葉にならない。

遊子 「死んじまえ。」

#朝。広い公園。

ひとりでケンケンする遊子。孤独。

#街角の遊子。ギターで唄う。

#ぼんやり人々を眺める

#青空を見上げる

遊子 「馬鹿野郎。」

#再び廃線

遊子のバストショット

浩一のバストショット

服部のバストショット

#服部の営業先

会社から出てくる服部。チエツと舌打ちする

#高校の近く。

結局今日も売れなかった。肩を落として歩く服部。

高校生の集団とすれ違う。

いつのまにかおれもこっち側の人間になっちまった。

#服部と恋人

恋人に熱く語る

服部「いつか絶対ビッグになってやる。こんな街いつか絶対出てやるからな。」

13

#誰もいないグラウンド。

服部、思い切りキック。ゴールイン。

沸き上がる歓声。(服部の想像)右手を上げて一回り。全ては

過去の栄光。

#音楽終わる。ふたりは拍手

浩一「いいじゃん。いいじゃん。すげえな、お前。」

服部「おお。よかったよ。」

遊子「いえいえ、お恥ずかしい限りで。」

服部「お前プロにならないの。」

遊子「プロ？考えたことないけど……。まあ無理でしょう。いいんじゃない？いまのままです。」とところでさ、向井の映画監督になるっていうのはどうなったの。」

浩一「あんなのガキの夢だよ。」

服部「結局あの映画完成しなかったな。」

浩一「その話はいいつつうの。」

遊子「服部と陽子が主演で、あたしが服部に思いをよせてるヒロインの親友A子？おいおいだよね。なんであたしだけA子なのよ。」服部

「こいつさあ、津島にほれてたんだぜ。」遊子「ばればれよ。そんなの。こいつ陽子ばかりひいきしてさ、ジュースとかご飯とかおごつてたじゃない。でもあたしには全然つめたくってさあ。常楽寺の長い階段あったじゃない。あそこ何回もはしらせといて『もういいよ。帰って。』だって。最低だよね。」

服部「あったあった。」

浩一「悪かったからさあ。もうやめよう。」セリフの再現

服部「『僕は彼女のことを考えると胸がキュンとなって夜も眠れなかった。』」

遊子「（大笑いして）『たとえば、あなたと圭介が結ばれても私たちは

親友よ。』だって。」

二人は大笑い

遊子「いっちゃってるよね。」

浩一「お前らそんなことよくおぼえてるな。」

遊子「でもさあ、圭介と美里は最後までどうなっちゃうの。あたし知らないんだけど。」

服部「俺も知らないんだよ。結局シナリオ見せてくれなかったもんな。最後までどうなるんだよ。」

浩一「え……。最後はな二人はバコバコやりまくってシャブ中になつてソープに売りとばされるんだよ。」

服部「君はあれで夢をあきらめたんだよね。」

遊子「そうなの？」

浩一「そうだよ。」

服部「賢明だ。」

遊子「賢明だ。」

浩一「チッ。」

服部の恋人が妊娠 (動物園)

助けを求める女

目を合わせようとしない服部

そんな大事件も象にはなんの影響もない

ホームでも無言のふたり

通り過ぎる電車

#服部の実家

今日の昼間、彼は浩一に恋人が妊娠したために結婚を決意したことを知らせる。

午前3時。彼はそのことを思い出し感慨深くなっている。高校時代のアルバムを見ている服部。

電話がなる。

服部「もしもし。」

遊子「もしもし。和彦君いますか。」

服部「僕ですが。…(嬉しそうに)遊子か。」「遊子「寝てた？」

服部「いや、起きてたけどさ。何だよ。こんな時間に。」

遊子「え、いま何時。」

服部「3時。」

遊子「ごめんね。遅いよね。」

服部「いいよ。…とところでどうしたんだよ。」「遊子「別に用事があつたわけじゃないんだけどさ。この間は楽しかったね。」

服部 「そうだな。」

遊子 「また会おうよ。」

服部 「今日、浩一に会ったぜ。」

遊子 「えー。なんで誘ってくれなかったの。暇だったのに。」

服部 「ああ。悪い。声かければ良かったな。」遊子 「誘ってほしかったな。…向井元気だった？」

服部 「元気だったよ。」

遊子 「なんか今日、元気ないね。」

服部 「そんなことないよ。」

遊子 「…あいつさ、私のこと何か言ってた？」服部 「言ってたよ。」

17

遊子 「なんて？」

服部 「遊子、きれいになったなって。」

遊子 「本当？」

服部 「本当だよ。」

遊子 「嘘でしょ？」

服部 「俺は嘘はつかない。本当のことを言わないことはあるけどね。」

遊子 「ざまみろだね。飲んだの？」

服部 「飲まなかった。明日飲むんだ。お前も来いよ。おしやれしてさ。」

遊子 「明日はだめだよ。明後日にしようよ。」

服部「あいつ、明後日帰らなくちゃいけないんだって。……来てくれよ。」

遊子「一日ぐらい行くの延ばせって言ってやんなよ。」

服部「大事な用事があるんだってさ。でもお前こそ何でだめなんだよ。」

遊子「バイト。」

服部「休みもらえばいいじゃねえか。」

遊子「クビになっちゃうよ。この間もさぼったんだし。」

早朝 3人で飲んだ帰り

服部はべろべろに酔っぱらっている。

服部「知ってるか。俺はガキのころは天才ってよばれてたんだぜ。」

『天才』だぜ『天才』」

浩一「分かった、分かった、何回も聞いた。」

服部「天才だぜ。」

浩一「お前は天才だ。」

遊子「こいつ、こんなに酒癖わるかったっけ？」

遊子は服部の介抱

浩一はふたりから離れて煙草をすっている

服部「お前よく見るといい女だな。おれの妾にしてやるよ。服部和彦様の2号によう」

遊子「あんたにつくほど私は安くないの。おとといきやがれつつうの。」

服部突然ゲロを吐く

遊子「サイテー。信じらんない。」

遊子逃げ出す

服部は一人で騒いでいる。

服部「俺はなあ、3歳で自分の名前を漢字で書けたんだぜ。小学校のころは5ばかりでよう、俺は博士になるって言われてたんだぜ。19てめえらよう、俺を誰だと思ってやがる。なめるんじゃねえよ。」

服部を見つめる浩一のアップ

服部の声「結婚することにした。」

浩一の声「え？」

服部の声「できちまったんだ。ガキがさあ」浩一の声「……。」

遊子逃げ出し浩一のところにやってくる。

遊子「まいっちゃった。もう、なんとかしてよ。あいつ。」

遊子 浩一の飲んでいた缶コーヒーを取り上げて飲む。

浩一 静かに笑う。

遊子 「どうしたの？」

浩一 「…みんなどっかにいっちゃうんだなって。」

遊子 「文学青年しちゃって…くだらない。くだらないよ。そんなの。」

(優しく笑う)

浩一 意外そうな顔で遊子の顔を見る。

遊子 「おセンチな気分になるのもわかるけどさあ。もうみんな過ぎたことじゃん。消えちゃった事をいつまでもくよくよしたってしょうがないって思うな。(即興で歌をうたう) “Nothing is real.Nothing is real”」

浩一 「『全ては存在しない』か。」

遊子 「全ては存在しない。あんたと私が今ここにいてるってこともさ結局消えちゃうんだから。」

浩一 「…」

遊子 「あたしはね、『今』しか信じない主義。昔のことは全部切り捨てるの。だから昨日の遊子と今日の遊子と明日の遊子はまったくの別人なんだ。」

浩一 「…お前変わったな。」

遊子 「誰でも変わるわ。あんただって変わったわよ。」

浩一「変わったのかな？」

遊子「変わった。」

浩一、服部を見る。

騒いでいる服部のアップ

浩一「すごいな。遊子は。」

遊子「なにが？」

浩一「やりたいことやって、行きたいところに行つて。人生を楽しんでる。お前のパワフルなところさ、俺尊敬するよ。」

遊子「ありがと。」

浩一「それに比べて俺なんてさ……夢なんてひとつもかなわなかったよ。」

21た

回想

服部「仕方ねえよな……でも後悔してるわけじゃないんだ……あいつといると落ち着いた気分になれるしな。いい奴だよ。優しい娘なんだ。

(自分にいい聞かせるように) よかったんだよな。きつとこれだよ
かったんだ。(天を仰ぎ) 俺も東京に行きたかったな。大学行けばよ
かった。」

浩一「いつまでも過去にしがみついている奴のことをきつとお前は軽蔑

するんだらうな。」

遊子静かに首を振る。

遊子「軽蔑なんてしないよ。軽蔑なんてしない。」

遊子立ち上がって走って行く。

浩一はいぶかしげにそれを見る。

遠くから

遊子「(大声で) あたしさ

(前身アップ) 大好きだよ。

(顔アップ) 大好きだよ。」

浩一のアップ。わらう。(最高にいい表情で。)

山手線の中

通勤途中の浩一(スーツ姿) 寝ている。

目覚める浩一。電車を降りて 駅の階段を他の群衆とともに降

りて行く浩一

終わり